

論文

16世紀メキシコ屋外教会の類型と
その中におけるクイラパン三身廊式
教会の位置づけ

On the Architectural Characteristics of Open-
Air Chapels in Sixteenth-Century Mexico and
a Case of Cuilapan, in the State of Oaxaca

加藤 薫*

Kaoru Kato

Summary

The sixteenth century is the fundamental period for the history and formation of Colonial Age. It was the period in which native American tradition and newly arrived Spanish civilization confronted in a radical way. When a handful of Spaniards conquered the Indian land, they imposed western superstructure on the existing indigenous cultures. Religious missionaries developed a sense of responsibility toward the Indians. The friars wisely featured the traditional western architectures in the new environment. It was the most interesting period to study missionary methodology and religious arts. Among the sixteenth century Mexican religious architectures, churches of open-air type are the most significant.

One of the difficulties of the conversion task was that the conversion was massive. The atrio(or patio), generally opened upon the main plaza of

* メキシコ国立美学研究所(美術史)

the town, was allowed to accommodate large number of people. The atrio was the place where the friars directed the catechism, where Indians listened to the "doctrina", where children learn knowledge, and where processions were held. Mass, and the administration of sacraments, were performed under the architectural covering which supplemented the atrio and was faced toward the Indians under the sky. This covering over sanctuary-to-be-functioned for the open-air mass varied in styles from one to another.

It is the purpose of this paper to present an account which includes the description of major characteristics of open-air chapels and their types which are categorized under a scheme, and a case study of the three-aisled hall type open church at Cuilapan in the state of Oaxaca. The author visited this site in May 1981 and examined the whole architectural complex. Earlier descriptions such as Kubler's, McAndrew's, Mullen's, and Toussaint's, were extremely useful to organize this survey. Since the reconstruction project has been almost over, the appearance corresponds to the reports which were presented in the last ten years or so. The argument of this paper, therefore, is mainly devoted to the interpretation of this unique construction whether this could be categorized as a type of open church or should be understood that once the church was intended to be an ordinary roofed church. After analyzing the construction and many written documents, I conclude as the three-aisled church was designed to be an open church for Indians.

I

本稿は1981年5月、筆者の属するメキシコ国立美学研究所(I. I. E.: Instituto de Investigaciones Estéticas)の協力と国立人類学歴史研究所(I. N. A. H.; Instituto Nacional de Antropología e Historia)の植民地時代遺跡部門の許可を得て単独で行ったメキシコ・オアハカ州クイラパン(Cuilapan)に於ける三身廊屋外教会の調査を元にメキシコ滞在中にまとめたものである。

屋外教会は16世紀メキシコ宗教建造物の中でも一身廊教会と並び、極めて独自の発展を示した建築様式の一つであるが、その中でもクイラパンの例は最

もユニークな存在として知られていたし、それ故にメキシコ建築史の中でも大きな論議の対象となってきた。

屋外教会の名称はスペイン語の *capilla abierta* (英語: open chapel) の邦訳である⁽¹⁾。メキシコ美術史研究の中でこの用語を初めて採用したのは Manuel Toussaint であり、彼は3つの類型づけを行っていたが⁽²⁾そもそも西欧の伝統の中には *capilla* を建築的な意味に使うことはなかった⁽³⁾。おそらくメキシコの屋外教会を独立した建築様式として観察し、幾つかのタイプに分類し記述したのは Robert Ricard⁽⁴⁾が初めであり、同じ頃に建築史の中で屋外教会を扱ったモノグラフを出したのは Rafael García Granadas である⁽⁵⁾。共に1930年代のことであった。屋外教会(*capilla abierta*)と *capilla de indios* は R. G. Granadas 以後、現在までほとんど同義語に使われているが、厳密に言うならば区別されなければならない⁽⁶⁾。*Capilla de indios* はインディオに要請された信仰(キリスト教)の維持のために日常の社会活動、教育活動、肉体活動(劇や踊りや労働)の管理指導を行うための物理的な建物のことであり⁽⁷⁾、このことからインディオのために建てられた礼拝用建築は全て含まれるわけであり、建築物の使用目的と方法の定義であっても、建築様式の意味はなかった。前記の R. G. グラナダスも後年の著作では *capillas abiertas* の名称を使うようになっている⁽⁸⁾。屋外教会がメキシコ16世紀建築史の中で独立した一項目として扱われ、様式的な研究が飛躍的に進んだのは従って1940年代に入ってからである。第2次世界大戦後の交通機関の発達と道路の整備、写真技術の進歩などは美術史研究をより容易なものにした。一方で無知からくる文化財破壊が進む中、メキシコ植民地時代遺跡の修復保存の文化政策も着実に成果を上げてきている。今日の我々の世代に於ける屋外教会研究の最大の成果は John McAndrew の著作に見ることが出来る⁽⁹⁾。

本論はこういった先人達の成果を踏まえつつ、1960年代後半から一部70年代まで I. N. A. H の手によって修理再建のなされたクイラバンの建築複合のうち、メキシコの中でも最も特異な性格を持つ三身廊ホール型教会堂の屋外教會的な要素を再検討してみることにある。結論めいた事を先に述べれば1981年の筆者の調査でも R. J. Mullen の調査以上の目新しい事実は見当らなかつた⁽¹⁰⁾。従って本論の主眼はこの特異な建造物の屋外教会としての性格の解

にある。ある特定の建造物のモノグラフは全て最終的には建築家、或いは建設にたずさわった人々のオマージュの再構成に帰するとすれば、筆者自身の美的体験からこの16世紀メキシコ建築の中でも特異な性格を持つ、クイラパンの屋外教会に対し、今日的な視点からある解釈—もれ論単なる視覚的な印象にとどまらない—を試みることは正当であろうし、事実それだけの余地を残した研究対象でもあるのだ。

II

屋外教会の一般的性格を語るためにはまずメキシコ16世紀における都市計画の中で教会建築の占める位置を確認することから始めなければならない。植民地時代の都市は自然発生的な村落から発展したものではなく、極めて人工計画的なものだった⁽¹¹⁾。町の中心にまず巨大な広場が設けられ、そこを中心に縦横に直線的に道路をはりめぐらし、広場を中心に格子状の家屋ブロックが構成される⁽¹²⁾。教会堂や修道院などは普通この広場の東側に道路をへだてて面し、その境界を明らかにするため、広場側の道路に接して階段が数段設けられその上に門が建てられる。教会の敷地全体は石かアドベ造りの壁で囲まれる。この敷地を atrio と呼ぶがその形状、大きさは地形や人口の多少等によって様々に異なる。西欧においても教会堂のまわりにアトリオを持つ例は初期キリスト教時代からローマ時代の建築、またスペインに於ける中世教会やイスラム建築などに前例としてあるが、こういった西欧建築の文脈で存在してきたものとメキシコのアトリオとの関係について、関連性を見るか、差異の大きさを見るかによって見解は分かれる⁽¹³⁾。

いずれにせよメキシコの屋外教会はその存在の大前提としてこの広いアトリオがなければならない。メキシコの場合、教会敷地の機能を正確に表現するにはアトリオという語は不適當だったためか、16世紀には使われなかった。メキシコの屋外教会ではこのアトリオが普通の意味の教会での身廊部として使われたわけだが、そこでインディオ達は通常のミサを受け、秘蹟を施してもらい、教育をさずかり、技術工芸を習った。ここはまた宗教劇の舞台にもなり、地域のコミュニティ・センターや市場の機能も持ち、祭りの催し場でもあったし、時には宿泊所にもなった⁽¹⁴⁾。メキシコに於けるアトリオを使った屋外教会の

発生は修道士達による初期布教活動のかかえる問題の解決のための革命的なアイデアの一つとして生まれたと考える方が妥当に思える⁽¹⁵⁾。それは絶対的にも相対的にも数の少い修道士達が圧倒的に多数のインディオ達に対していかにカトリックの儀式を効率的にしかも出来るだけ多くの人に授けることが出来るか、という問題であった。伝統的な西欧型の教会堂ではとても多人数を一時に収容できないことは明らかであったし、当時の技術水準では数千人を一堂に集める教会堂などを設計する建築の専門家も存在しなかった⁽¹⁶⁾。アトリオを身廊部に見たてるといふ発想はこの現実の要請から生まれた。屋外教会はまた狭い室内空間に人が集まることによって当然考えられる、まだ多数のインディオが免疫を持たない流行病、天然痘やはしか、の感染を最小限に押えられる、という意味もあったし⁽¹⁷⁾、また古代の神殿のあった広場から古代土着宗教の偶像や神殿、ピラミッドをとり除いて代りに十字架を埋め込めばすぐにキリスト教布教の用途に使えるという時間と費用の経済的効果もあった⁽¹⁸⁾。

カトリックの典礼の中心はミサだが、西欧でのミサは伝統的に屋内で行われることを前提としていた⁽¹⁹⁾。キリスト教建築の歴史を見ても、建物では壁と天井に区切られた空間というものの存在がエッセンシャルなものであり、この内部空間を確保するために建物は存在する。建物の外部は内部の世界を象徴するためにある。これはメキシコの古代宗教建造物はその機能を全て外面に備えているのとは決定的に違う所である。西欧での屋外のミサは戦争や狩猟、旅行、巡礼、亡命の途にある時といった一時的、緊急の時の臨時的措置である⁽²⁰⁾。これに対してメキシコの場合は半永久的に、屋外が教会として使われ、そこで定期的にミサが行われることを前提にアトリエの設計が進められた。アトリオには様々なものが配置される。まずアトリオの中心に石造の十字架が置かれる⁽²¹⁾。これはシンボリックなものであるが、時には十字架の台座に小さな祠を設け、礼拝できるようにした例もある(例：Jilotepec)。アトリオには樹木が並木のように植えられるが、普通アトリオの内側壁に沿って通路をへだてて平行に設置されたり、教会堂西正面部からアトリオの門を結ぶ線に沿って植えられる。これは暑い日差しから身を守るためという意味の他にアトリオ内で行われるプロセッションの行進に方向を与える機能もある⁽²²⁾。並木の内側が墓所として使われることもあるが⁽²³⁾、普通はオープン・スペースとして野外の催し

ものために開放されている。アトリオの四隅には *posa* と呼ばれる小礼拝所が外壁隅に密着して、或いは人1人通れる位の隙間をあけて、対照的な位置に置かれる。開口部はアトリオ内に向かって1つか2つ向けられている。内部はサイコロ型の単室房空間となり、床には普通、携帯用祭壇を置くに必要な台座が固定されている。材料にはアドベや石のブロックが使われる。屋根は三角錐ピラミッド形をしているものが多いが丸天井のものもある。従ってポーサは祭壇を埃や雨等から保護するために設けられた野外の天蓋(*ciborio*)と考えるとよいようだが⁽²⁴⁾、同時に視覚的にあまり面白くもない祭壇を権威づける意味もあっただろう。建築構造的には極めて単純なものだった。インディオ村落では昔からのカルプリ制度が継承されることも多かったから⁽²⁵⁾、各 *barrio*(普通4つ)毎に1つのポーサを持つことになる。大きな地域と人口をかかえる所では日曜祭日に各地から集まるインディオ達を部族毎、或いは言語別にグループ分けして各ポーサ毎に修道士が付いて説教や問答、或いは行事、日常生活の指導などを行った。アトリオには移動用、或いは半固定式の説教台(*pulpito*)が設けられた例もあるが現在までその痕跡を残しているものはあまり沢山はない(例: Cuernavaca, Tochimilco)。アトリオを囲む壁の内側には聖者を祭る壁龕が壁の厚さを利用して掘り込まれていることもある(例: Zempoala)が、壁から離して小さな祠をしつられている場合もめずらしくない(例: Tzintzuntzan)。布教初期、多数のインディオを対象にした洗礼は全て野外で行われた⁽²⁶⁾。これは洗礼者ヨハネによるキリスト教最初の洗礼が野外で行われた故事にならって正当化されたが、当然洗礼のための聖水盤も野外に置かれたことになる。しかし現在まで昔の位置に残しているものはないのでその場所については確定できない。その他 *espadaña*(鐘楼)もあった。

アトリオの存在の第一義が屋外に集まるインディオに対する宗教儀式、とりわけミサのためにつくられたことは先に述べた。当然ミサには祭壇の存在が不可欠であるが、この祭壇を保護するための適切な覆いが必要だったし、修道士達もその職の遂行のためにアトリオの空間の中で区切られた場所を必要とした。これが屋外教会の発生につながる。建築史や美術史の中で定義される屋外教会とは“sanctuary arranged for regular outdoor Masses”⁽²⁷⁾のことで、即ち定期的な屋外ミサのために(身廊部に見たてたアトリオの空間に向けて)配置された聖

所のことである。先に述べたアトリオの中の様々な16世紀建造物の建設順序を概念的に構成してみると、まず十字架が置かれ、次に極めて暫定的な先・屋外教会とも呼ぶべき聖所が設けられる⁽²⁸⁾。次にポーサや説教台などが設けられるが、ポーサの建築様式の発生には先・屋外教会の簡単な祭壇の上の覆いという建て方が関係している。ポーサは順次石造の恒久的なものとして建てられてゆくが、その時までには屋外教会とポーサの機能は分化している⁽²⁹⁾。さてこうした改宗の手続きに最小限必要な場所と施設が整った所で初めて修道士達は自分達の居住場所となる修道院とその付属教会堂の建設に入る。修道士達の寝泊りする所、事務所、教育のための場所、そして自分達の聖務を果たすための場所といったものは何も修道院や屋根付教会堂でなければ出来ないといった類いのものでなかったから後回しにされたわけだ。そして修道院及び教会堂が形を整えると最初の暫定的屋外教会はより恒久性のある石造りのしっかりしたものに建て変えられる⁽³⁰⁾。少くとも布教開始から半世紀間は屋外教会だけが定期的にインディオ達がキリスト教典礼に参加できる場所であった。インディオ達は他の何処かの屋根のついた教会に属しながら一時的に屋外教会で礼拝するのではなく、彼らは始めから屋外教会そのものに所属していたのである。スペイン人入植者達は西欧型伝統の屋根のある教会堂を欲したが彼等の欲求を満たしたのは在俗の教区教会である。屋根のついた修道院附属教会も基本的にはインディオ達のためであり、白人は他に行く所がない時だけ修道院附属教会に礼拝に出かける。1つのアトリオに屋外教会と修道院附属教会堂の両方が完成した所では使い分けが行われる。即ち日曜祭日の多数のインディオが同時に訪れる時には屋外教会を使い、平日や天候の悪い時は屋内でミサを行うというパターンが普通である⁽³¹⁾。従って屋根のある修道院附属教会が完成したとたん屋外教会が廃止されたという事ではない。インディオとスペイン人の混血化が進み、メスティーソ層が増大して白人用教会とインディオ用教会の区別があまり意味をもたなくなった17世紀末期でも1部のインディオのために屋外教会は使われた⁽³²⁾。これは主に言語の問題があったためである。最後に方位の問題について若干述べておこう。メキシコの教会堂一般はそれが平地に建設されるのであれば一定の規範を踏襲している⁽³³⁾。即ち町の中心広場の東側にアトリオが設けられた後、そのうちの南東部分が修道院建築のためにあてられる。教会堂は

修道院の北側に壁を接してつくられる。教会堂は聖所、祭壇のある側を東側に、身廊部を西側に向ける。オープン・スペースとしてのアトリオは従って北側半分を東西に結ぶたて長の面と西半分を南北に結ぶ面で作られるL字型の空間となる。屋外教会は多くの場合東西に細長く伸びる教会堂北側の空間にやはり東側に祭壇を置く向きで建設される。これはL字型のアトリオの縦の線にあたる空間を有効に使うためであろう。この場合、教会堂の北門は屋外教会への聖器の運搬や聖職者の出入りのために使われる⁽³⁴⁾。一般的な分布状況を分析すると屋外教会の聖所の建築場所は教会堂西正面ファチャダに平行に引いた南北の線上のあらゆる位置に存在する。従ってアトリオの西側は屋外教会の身廊部分ということになる。アトリオの地平面に対し屋外教会の高さのレベルは、アトリオと同じ高さのものから、オルガンや聖歌隊席の置かれる教会堂のコロ(coro)の高さまでの範囲で様々にある。屋外教会建築の場合、同じく16世紀の典型的建造物であった一身廊教会のようにこれは原型であると言えるようなモデルはない。

III

さて本論で問題とする屋外教会の構成部分を大別すると普通の教会の身廊部にあたるアトリオの部分と祭壇の置かれる聖所の部分に分けられ、普通屋外教会といった場合、この聖所の建築部分を指すことは述べたが、美術的にも考察の対象となるものはもち論この聖所の仕様である。様々な分類の仕方があるが以下のように整理してみよう⁽³⁵⁾。

A. 単室房タイプ

1. (1) 西側に面して修道院建築複合の中に収められているもの。
 - a. 修道院上階の高さのレベルにあるもの。
 - b. 修道院下階の床と同じレベルにあるもの。
 - c. 修道院の下階と上階の間の高さにあるもの。
1. (2) 北側に面して修道院建築複合の中に収められているもの。位置は高いのが普通。
 - a. 厚い控え壁の間にはさまれているもの。
 - b. 北門の上に置かれているもの。

2. 修道院教会西面ファチャダから突出した形で設置されているもの。
 - a. アトリオから上に持ち上げられた位置にあるもの。
 - b. アトリオと同じレベルにあるもの。
 3. 鐘楼の下に収められているもの。
 4. 修道院附属教会堂建築複合から離れた位置に西側に面してつくられたもの。
 - a. 階段などでアトリオのレベルから持ち上げられているもの。
 - b. アトリオと同じレベルにあるもの。
 5. 修道院入口の上部に乗っかるような位置に収められたもの。
 6. 教会西正面ファチャダの教会堂入口上部、即ち聖歌隊席台部に設けられたと考えられるもの。
 7. 単室房タイプの変種として二つの祭壇が別々の覆いの下で二つ以上並んでいるもの。
- B. ポルティコ・タイプ
1. アトリオの高さとほぼ同じレベルにあるもの。
 2. 修道院入口の上部に乗っかるような位置に収められたもの。
- C. ポルテリア・タイプ
- D. イスラムのモスクのように多数の支柱と多くのアーチ形開口部によって空間が確保されているタイプ。
- E. 二段に分かれたアトリオの中間の位置に上部アトリオの半地下のように埋め込まれ、中央主室と少し後ろに引いた2つの側室を左右に備えたタイプ。
- 屋外教会は以上のように大まかに分類されるが⁽³⁶⁾、各項目グループはさらに天井の形態、開口部のアーチの様式、建築材料、装飾意匠等によって細かく分類される。

さて、本論で分析したいクイラパンの屋外教会を以上の分類にあてはめるならば聖所の形態と方位から、北側に面している単室房でアトリオと同じレベルにあるもの、という所になるがそれだけでは不十分である。何故ならクイラパンの場合、普通開放空間として残されるアトリオ部分を三身廊型教会形式で閉じているからで、屋外教会を身廊部のユニークさから考察しなければいけない例はメキシコではあと三つある位のものである⁽³⁷⁾。

IV

クイラパンはメキシコ市の南東の方向に約 560 km 程離れたオアハカ州首都オアハカから直線で約 8 km 南西の、モンテ・アルバンの山麓からややはずれた位置にある。オアハカ地域に定着していた古代土着部族で有名なのはミステカとサポテカだが、その言語体系からオアハカ州を大別すると北半分がミステカ語系統の言語を話す諸部族、南側がサポテカ系統の言語を話す諸部族の住む地域に分かれていた。10世紀頃から北部高地に住んでいたミステカ人達はサポテカの領土に侵入していった。クイラパンは侵入の最先端を占める地点であった。ミステカがこの地に定着したのは13世紀になってのことであり、ミステカ王の娘とヤンウイトラン(Yanhuitlán)の領主の結婚によってその権利と地味は不動のものになる⁽³⁸⁾。以後ヤンウイトランの領主はクイラパンに住むようになるが、1500年頃には既にミステカ語がクイラパンの日常語となっている⁽³⁹⁾。征服後、土地の権利はコルテス一家に与えられていたが、村の行政はドミニコ会の布教地として彼らがとりしきっていた。クイラパンはドミニコ会士によって1534年以後1550年以前の或る時期に、モンテ・アルバンの山麓から、主に水の確保の理由で、小さな丘が続き川が流れる現在の地に移動した⁽⁴⁰⁾。19世紀にドミニコ会がこの修道院を廃棄した後は、学校、流民収容所、監獄などに使われてきたが1960年代に入ってからI. N. A. H. の手で管理されるようになる。現在(1981年)の様子は州道沿いに1軒清涼飲料を売る店がある他学校が隣接してあるが、昔の面影はない。クイラパンの人口はこの屋外教会が建てられた時期約2万人位ではなかったか⁽⁴¹⁾。

V

さてクイラパンの建築複合の概観を述べていこう。まずアトリオだがその形は南北に細長い長方形で約 240 m × 120 m の敷地を持つ。しかし土台の様子から16世紀当時は北側にもっと広がっていたと考えられる。少くとも現在墓地としても使われている北西隅にはポーサがあったとも考えられるが確実と言える痕跡は残っていない⁽⁴²⁾。屋外教会は、アトリオ南側部分で東西に横たわる教会堂北壁から門のあるアトリオ北側に向かって伸びている。その屋外教会北ファチャダの前方にやや唐突な感じで小さな階段石組みの上に十字架(の残存

物)が置かれている。ファチャダは左右両端にあるロマネスク風の塔にはさまれて3連の身廊部へと導くアーチ形開口部を持つ入口があり、中央入口は一段と高い。左右の低い開口部の上には牛眼窓があり、中央開口部上方には三角破風が乗っている。これら入口には木の扉をつけていた跡があるが現在は無い。ファチャダ表面の装飾の全体的意匠はルネサンス・プラテレスコ風で、この様式が見られるのはクイラパンの建築複合の中でもここだけである。壁柱が垂直方向のアクセントになり、他の平面にはドミニコ会の紋章とシンボルの犬があしらわれている。ファチャダを支える東側外壁には8連、西壁には9連の何の飾りもないアーチが開いている。東側にアーチが1つ足りないのは中央部内側の壁に説教台を組み込んでいるせいである。この東西外壁のアーケード開口部の意匠とファチャダの開口部の意匠にはスペースのとり方に何の関連性もない。東西外壁の上部にはまた各2つずつ長方形の窓があげられていて、その位置は屋根の水平線の下にある。東壁の最上部には排水口の跡があるがこれはつまり屋根が置かれたことを意味する。東西のアーケードのうち聖所に1番近い所の開口部は一段と上部から大きく開いている。これらにはファチャダの開口部のように扉をつけられた形跡はない。身廊部内側に入ると、中央身廊と左右に一本づつある側廊とが擬似トスカナ風台座と柱頭を持ったロマネスク趣味の支柱で支えられたアーチの列によって分けられているのがわかる(西側アーケードは未修復のままである)。このアーチの高さは東西の外壁のアーチより1.5m程高い。中央身廊の幅は各側廊の幅の2倍あり、床の高さは中央身廊も側廊も同じレベルである。この内部アーチの列は北側ファチャダの内面までは届いておらず、ただの平らな壁が残された隙間を埋めている。おそらくこの上に聖歌隊席が設けられたものと思われる。この身廊内部の13連アーチの全長は約70mで中央身廊の幅は8mある。東側外壁の南北の中間位置に石造りの、天蓋を備えた説教台が床から1.3mの位置に固定されている。天蓋と足を乗せる台座の形は正面から見ると、ちょうど球を水平に輪切りにして上下に切り離したように見える。この説教台に登るためには南側から厚い壁を利用して刻まれた螺旋階段で壁の中を通ることになる。アトリオのレベルから数段上に持ち上げられた聖所は現在教会堂内陣から出入り出来るだけでアトリオ側は塗込められてしまっているが凱旋アーチで開口部が覆われていたことはわかる。聖所は4角

の箱のような部屋で天井は角度の浅いゴシック式十字交差穹窿が支えている。南北の深さは6.5mある。祭壇の跡はない。聖所に並んで東側に同じ仕様の部屋が接していてここは聖器安置所に使われた。壁にはフレスコ画がある。聖所に並んで西側にも同じような造りの部屋が接しているが現在は封鎖されている。ファチャダ内側から聖所の1番北奥までの距離は敷居の幅を加えて約77mということになり、また東西両壁間の幅は18mである。西側外壁の聖所寄りの内側にミステカ語の日付が彫られた石板が地上約2.5m位の所にはめ込まれている。それには1555年という文字が刻まれているが⁽⁴³⁾、建設開始の礎石と考えるにすれば位置が高すぎ、従って建物の完成、または少なくとも壁がこの高さまで築かれた時の記念にはめ込んだと解釈される。教会堂北壁と聖所及び東西の続き部屋の南壁は接しているわけだが聖所が埋め込まれているわけではない。ちょうど教会堂の外側控え壁にはさまれて、その控え壁の機能を補強しているかのようである。従って先の屋外教会の分類では1.(2). a.の一変種ということになる。さて次に屋外教会の南側に東西に横たわる教会堂に移るが、これは内陣以外ついに未完成のままに終わっている。一身廊形式で壁は厚く約3mある。西門と北門は共に純ルネサンス(purista)様式で出来ている。ことに西門ファチャダは三角破風の上につけられた左右の窓とのバランスもよく調和している。内部の天井部分はゴシック式十字交差穹窿を意図していたことがわかる。教会堂の南壁は修道院廻廊部の北壁も兼ねている。教会堂から修道院への出入りには壁にあけられた1階部のトンネルのような通路を使う。修道院は2階建てであり、食料倉庫、台所の大きさ、僧房の数(16室)、便所穴(8個)等から収容人数の設計規模が推察できる。修道院1階部と教会堂の壁は一体化構造で壁の厚さも全て統一されていることから、同時期一緒に建設されていったことがわかる。修道院2階部の中庭に面した開口部は1階部分が将棋の駒型の控え壁で支えられているのに対し、より洗練された軽い感じのアーチと半円柱で支えられている。10年位は後の時代の建設だと思われる。修道院廻廊部西側からアトリオ南端に向かって長方形の翼部のようにノビシアードが突き出ている⁽⁴⁴⁾。ここは屋外教会や修道院、教会堂よりも後の時代に増築されたものである。修道院西側出入口部分から教会堂西門ファチャダと直角にアトリオ西壁に向かって全部で9連のアーチでアトリオ北側に開かれたポルテリーアが東西

方向に走っている。壁側にはノビシアードに出入りするための門があけてある。この形式は先の分類で述べたポルテリーア・タイプの屋外教会と見ることが出来る。北側には十分なアトリオ・スペースがあり屋外教会の機能は十分に果たせるからだ。

さてこういった現在の状況を過去の資料と照らしあわせ、どの位の変更があるのか少し検討してみよう。聖器安置所の壁に1枚の白黒フレスコ画があるが、その十字架のキリストの腰の右横と、殉教の象徴である斧の刃で割られた聖サンティアゴの頭の間に見える背景の中に屋外教会の様子が描かれている。4本の塔が建っているがこれは屋外教会のファチャダ横の2本、西側外壁の外部に下部だけ残っている円筒形の石座、そして教会堂の東側にアトリオ東壁と接して現在も鐘楼として使われている4つの建築部分と対応する。フレスコ画では三つの開口部が正面を向いているがこれも屋外教会の北ファチャダと対応する。その他フレスコ画では全体がタイル瓦屋根で葺かれているが、これはない。文献としてはほとんどのメキシコ美術史研究者は Francisco de Burgoa の 1670 年の記述を引用しているが、その中でクイラパン屋外教会に関するものを拾ってみると、

1. 聖歌隊席は身廊部の中央に“大聖堂”のように配置されていた。
 2. 身廊部東西外壁の連続アーチは全て塗り込められていた。
 3. 木造梁構造の平屋根が覆っていた。
 4. 聖所の天井の支えとして5本の十字交差穹窿が中央から出ている。
- ということになっている⁽⁴⁵⁾。

以上をまとめてみるとクイラパンの主要建造物としては、1) 三身廊ホール型屋外教会。2) 2階建修道院。3) 教会堂。4) ポルテリーア・タイプ屋外教会、の4つがあることになる。

VI

さて次の作業としては以上の4つの主要建造物の制作年代の確認である。クイラパンの場合建造年月日を決定的に断定できるような資料はなく、全て傍証、或いは後世の歴史家の記述による推定でしかない⁽⁴⁶⁾。

クイラパンのドミニコ会による正式な承認(aceptación)は1550年である⁽⁴⁷⁾。この承認の意味はドミニコ会組織が、この建築拠点と布教地域についての土地から資金、地域内の行政、法的権利義務の関係など全てについて精神的物質的に責任を持つということである。その承認の前提としては、既に修道士達の居住区と少なくとも屋外教会、それにカシーケに統治された組織的信者がある程度集まっていることと、教団活動を助ける労働力が最低限確保されていることなどが条件となっている。

クイラパンの1550年の承認以前には従ってもう既に建築複合の全体計画は出来上っており、少なくとも屋外教会は使用されていたと言えるし、当然修道士達の寝泊りする修道院一階部はかなり出来上ってなければおかしいことになる。修道院一階部の壁部分は教会堂のそれと一体化しているから、こちらも同時に建設が進んでいたことになる。ポルテリーア屋外教会のアーチの支持柱の円胴部や台座は三身廊ホール型屋外教会の中央身廊部アーチと類似した意匠を持つことから同じ職人の手によるものと考えられる。三身廊屋外教会聖所の天井と修道院廻廊部1階の天井は等しくゴシック式十字交差穹窿で支えられているのでこれも同じ時期、同じ職人によるものとするのが妥当だ。修道院二階部分は増大した修道士の数に対応するため増築されたわけだがクイラパン自体に任命された修道士の数は1560年代までは1桁台と少かったので、他のドミニコ会修道院との交流を想定しなければならない⁽⁴⁸⁾。オアハカ大聖堂(現在のものではない)の完成するのは1555年のことであるが⁽⁴⁹⁾、これによってそれまで大聖堂建設に従事していた修道士達がクイラパンに回されたことが考えられる。1569年にはやはりまたオアハカのサン・パブロから修練生が研修に移動していることから⁽⁵⁰⁾、1555年以降1569年までには実用に供されたと考えられる。ノビシアードは遅くとも1578年のクイラパンで行われたドミニコ会中間集会のために修練生達は何処かに移動する場所がなければならなかったわけだから、既にこの以前には建設が始められていたことになるが、それは少なくとも1569年以後のことである。1604年クイラパンはオアハカ地区の上席に昇格しているが、この時には主にミステカ語を学ぶ学問所として機能していたので完成はその前であろう。教会堂西門の石積み構造を観察すると3層に分かれている。これはそれぞれ建設時期が違うことを示している。入口部分の枠は一体化した

作りであることから、おそらく西ファチャダの左右を支える控え壁が入口部分を保持するに十分な高さまで建てられた時一気にはめ込まれた。北門も同様である。

これらの断片的な分析からクイラパン建築複合の建築順序をまとめてみると、

1. クイラパンがこの地に移動してから 1550 年までは暫定的屋外教会が実用に使われていた。その場所は現在の三身廊屋外教会の聖所のある部分と考えていいが、この聖所の恒久的建築物への再建の際には、その時まで完成したポルテリーア屋外教会が使われた。
2. 1550 年までに修道院の一階基礎部分とそれに対応した同じ高さまでの教会堂の基礎部分、それに三身廊屋外教会身廊部の基礎部完了。
3. 1555 年までに三身廊屋外教会身廊部完成。修道院一階部分の完成と同じ高さまでの教会堂部分出来ている。
4. 1559 年までにポルテリーア・タイプ屋外教会完成。三身廊屋外教会聖所の改修工事が始まっている。
5. 1569 年までに修道院 2 階部、同じ高さまでの教会堂身廊部完成。三身廊屋外教会聖所ゴチック式十字交差穹窿の完成。教会堂西門及び北門のファチャダへのはめ込みと表面装飾完了。
6. 1578 年までに現在残っている高さまで教会堂完成(修道院 2 階部より約 8 m 高い)。三身廊屋外教会の天井部分の木造平屋根架設作業完了。これは仲々完成しない教会堂の代りにしようと計画された。教会堂身廊部の屋根はついに完成しなかった。
7. 1604 年までにノビシアード完成。という順になる。

VII

極めてアカデミックな議論をすれば、クイラパンの三身廊屋外教会は Mc-Andrew や Toussaint の言うようなバシリカ様式ではないし、また Kubler の規定する擬似三身廊教会 (cryptocollateral) にもあてはまらない。正確に言うならば“三身廊ホール教会型”屋外教会というべきだろう⁽⁵¹⁾。この三身廊ホール教会型屋外教会(以後単に「屋外教会」と約す)は建築様式としては極めて謎めいた要素を含んでいる。それらを列記すると、

1. 様式的不統一：聖所はゴシック式、北ファチャダはルネサンス・プラテレスコ様式、中央身廊部アーチはロマネスク風。そして身廊部外壁と塔は中世城塞風である。これらは全て制作年代の違いと、建築監督修道士の短期交代による指導の一貫性の無さということで説明がつく。身廊外壁は地震対策もあり、初期は技術的にも高度なことは出来ない水準にあったことから構造的には単純なぶ厚い壁に作られた。工期も早くて済む。中央身廊部のアーチ柱頭、台座などには古典様式にのっとった擬似トスカナ柱であるがロマネスク風に重い感じがするのは地震対策のためであろう。ポルテリヤ屋外教会のアーチはやはりプロポーシオンは悪いが少し後の時代のせいか軽やかな感じになっている。中央身廊部アーチは外壁が作られた後ファチャダの出来る前に始められたと考えられる。ファチャダはより古典的だが純ルネサンス様式ではなくスペインのプラテレスコ装飾の影響を受けている。教会堂西門及び北門がより純ルネサンス様式に近いことからこのファチャダは「屋外教会」の身廊が完成した1555年以後それほど時間のたゝない時期、そして教会堂西門、北門の設計が始まる以前のものであろう。ゴシック式十字交差穹窿天井は様式としては古いが、技術的には難しかったので木造平屋根やかまぼこ型丸天井の後にやっと習得される。そのため「屋外教会」聖所自体の完成は後の時代になった。聖所天井の工事がうまくいった後、教会堂内陣のより大規模な工事が進められた。ファチャダ左右にある2連の塔は全く中世的であるが、西欧各地のロマネスクやスペインの四塔建築と対応させるよりはメキシコ16世紀独自の軍事防衛的性格(実際には何も機能を発揮しなかった)を持たせるために独自に発展したものと見るべきだろう。これはまた一般の二連鐘楼形式とも違う。建設時期は身廊部の出来た後、ファチャダの出来る前の期間である。
2. 外壁アーチ型開口部：建設が最も簡単なために採用された壁の様式は工期を早めるためにとられた措置なのに何故わざわざ手間をかけて東西で計17もの開口部を設けたか。装飾部分は全然ないことから機能的に何か特別な理由があったと考えられる。一つには人間の出入りのためという事が挙げられるが、屋外教会として多数の人間が出入りするのであれば当然考えられる。但しアーチが南側の聖所の方に寄っていることを考えると、会衆は北ファチャダ側から入り、そちらに集まる人数が多いことから少し不自然である。オアハカ州のド

ミノコ会修道院には同じ時期建設されたやはり身廊部外壁に開口部を持つ例があり⁽⁵²⁾、それらは風の通りをよくして暑さを防ぐ意図があった。クイラパンもその例であろう。Kubler はこれら開口部は横置礼拝堂を設置するつもりだったとしている。彼は身廊部の縦横の長さの比率を見て南北に長すぎるし、屋根の設計されてなかったのは五身廊式教会の構想があったのではないかという仮説のもとに解釈しているわけだが⁽⁵³⁾、16世紀当時は三身廊式教会でもめずらしく、またそれらはスペイン人用教会であることが多かったし、様式的には純ルネサンス様式と結びつけられた事から見てあまりにも唐突である。

3. 窓：身廊部外側アーケードの上には東西計4つの窓があいているが、その位置はもし、この「屋外教会」が屋根を置くことを考えていたのならば、無意味である。何故ならもし屋根が置かれた状態での屋内の換気と採光を考えたのなら、もっと高い位置になれば機能しないからである。しかし一方、屋外教会を前提としての窓ならば、空気の出入りには窓の下のアーチ型開口部で十分間に合うはずで、今の所理由はわからない。

4. 説教台：説教台は、普通参加会衆を1点から見渡せる内陣の位置に置かれるのが慣しであるがクイラパンでは身廊東壁中央部にとりつけられている。壁と一体化していることから建設当初から設計されていたはずである。機能的には長短あり、長所としては身廊部最後尾(ファチャダ側)の人まで声が通り、口唇の動きもよく見える。短所としては今まで聖所の方を向いていた人が後ろや斜めを向かなければならないし、説教者も一度に全員を見ることが出来ない。

この説教台は「屋外教会」西側外部のアトリオにいる聴衆の存在も考慮しての設計だとも考えられるが、そうすると中央身廊の2本の南北に平行に走るアーケードや西側外壁が邪魔になり、音響効果も視覚効果も期待できない。Mc Andrew はドイツ・ルター派教会の例やポルトガルの例も掲げているが、クイラパンとの歴史的関連性については証明できていない⁽⁵⁴⁾。今の所、起源的にも機能的にも十分説明のつかないものである。

5. 扉：西ファチャダの三連アーチにはかつて扉がつけられていたことを証明する穴があいている。しかし東西外壁の開口部にはそういった扉をつけた痕跡はない。屋外教会であれば扉をつける必要は全くないし、聖所を守るためであれば何故よりによって1番遠い開口部に扉をつけるのか。聖祭壇、聖器類は鍵

のかかる聖器安置所に保管されるのが常だからこの意味でも必然性はない。屋根付の閉じられた空間を意識したのなら東西外壁の各開口部には当然扉がつけられたはずである。今の所、教会堂内陣が完成し、インディオの数も減少していった頃、何らかの理由で東西外壁開口部が塗り込められた。その後、一般の教会堂を意識して扉がつけられたと考えられる。その頃にはもう木造屋根はあったはずで、またこの天井は極端に低いから、換気口がなければ暑くて会衆はいたまれなかったはずである。従って開口部が塗り込められたのは19世紀に修道院が廃棄されてから、と考えるのが自然だが、Burgoaの記述した時代にはもう塗り込められていたとするから⁽⁵⁵⁾、そうすると今度は、理論的には実用のためを考えると天井はなかったことになる。扉がいつ何のために取り付けられたか今の所わからない。

6. 聖歌隊席：これについては、今の所それが何処にあったにしろ、どれも確実な根拠を明示することが出来ない。筆者はファチャダ裏側という一番伝統的な場所を考えているが、弱点は十分な人員を乗せられる台のスペースが構造的にとれないことである。

7. 大きさ：「屋外教会」の長さはファチャダ裏側から聖所の奥まで約77m、東西外壁間の幅は18mである。この長さとの比率は約4：1で16世紀メキシコ一身分廊建築の採用していた規範とほぼ一致する。しかしこの比率は屋根付教会堂を想定した場合のことで屋外教会の空間としては異常に細長く感じるし、三身分廊式教会として他の例と比較しても長い⁽⁵⁶⁾。ここからKublerのような左右にもう1つつ側廊を持つ五身分廊式教会の仮説や、初めは高い屋根でさらに上を覆う計画もあったという説も生まれるが裏付けとなる資料はない。この空間に収容できる人員は最大2千名位であろう。クイラパンの人口は建設当時約2万人であるから、日曜祭日にその半分が出席したとしても1日5回のミサを行わなければならない、これは改宗時のメキシコの習慣からしても多い。アトリオ空間全部を使えば何の問題もなかったわけだから、屋外教会の身分廊部をわざわざつくった理由は謎である。もし最初から閉じられた三身分廊式教会を造る意図なら教会堂と重複させる理由はないし、ポルテリニア屋外教会の建設が遅い時期に始められることはなかった。

8. 2つの屋外教会：クイラパンではほとんど同時期に相次いで2つの屋外教

会が建てられたが、これはメキシコでも唯一の例であろう(ポーサは厳密には屋外教会でない)。歴史的には「屋外教会」の聖所の改築の際に代用したものがたまたま後にも残ることになったという図式だが、実際には両方が同時に使われたと思う。おそらく収容人数の限られた「屋外教会」を補う意味でミサに交互、或いは同時にでも、2つの屋外教会を使って行われた。ポルテリヤは屋外教会の機能を持たない唯の修道院への入口だと考えるのは少し無理のようだ。もしそうだとすればアトリオ東壁まで長く延ばす理由はないし、またさして重要でもないノビシアードのためにこれだけ豪華なアーケードを用意する必要があったか疑問である。

9. 建築家: Toussaint も McAndrew も共にクイラパン「屋外教会」の設計建築監督としてポルトガル人 Antonio Barbosa の名をあげているが、これは建築年代を 1559 年以後としたために出てくる結論である⁽⁵⁷⁾。「屋外教会」の主要部は 1555 年までに完成しているが、バルボサはこの時カンペチエにいたはずでクイラパンに来たのは建築の知識のある司祭 Bernardo de Alburquerque と一緒に 1559 年のことである。従って一番可能性の強いのはクイラパンを現地に移す計画を実行した司祭 Domingo de Aguiñagua であろう。彼はまた 1552 年～1553 年、1555 年～1556 年、1558 年と計 5 年間クイラパンの修道院長を務めた。

VIII

さて結論であるが、クイラパンの三身廊式ホール型教会は1)それがインディオのために建てられ、2)聖所がアトリオに向けたあくまで野外を意識して設計され、屋外でミサを行った、という事から屋外教会であることに間違いはないが⁽⁵⁸⁾、1)方位が南北を向いている、2)身廊が壁で囲まれ、3)しかも中央身廊と側廊にアーケードで分けられ、4)説教台が身廊中央に固定されている、点で他に例がなく、しかも1)東西両身廊外壁に計 17 ものアーチ型開口部があり、2)にもかかわらずファチャダには扉をつけられた跡があり、3)聖歌隊席が特定できなく、4)無用の窓が 4 つもあり、4)しかも後世には木造平屋根を葺いて使用し、5)アトリオにはもう 1 つ別の屋外教会があり、それと併用して使われた、という諸点で世界でも非常にユニークな建造物である、と言える。

注

- (1) *capilla* の意味からして礼拝堂と訳するのが適切かと思われるかも知れないが、本論で検討するメキシコでも唯一のクイラパンの例があるため「教会」の名称をあえて使うことにした。また「屋外」とは野外一般の意味を含むこともあるが、16世紀メキシコ宗教建造物はその敷地がまず壁で取り囲まれていること、またその中で何らかの人工建造物によって礼拝用の空間が規定されていることから、一般の無限定な「野外」に対し「屋外」の名称を採用した。*abierta* の意味は“屋根のない”，ということに由来する。この用語の適用にあたって二つの例外が現存する。一つはプエブラ州 Cholula 市の *Capilla Real* であり、もう一つが本論で検討するクイラパンの例である。
- (2) Manuel Toussaint, *Iglesias de Mexico*, 6 vols. México, 1927, vol. VI. p. p. 15-16.
- (3) The Catholic Encyclopedia, New York, 1909, “chapel” 項 574-579.
- (4) Robert Ricard, *Conquête Spirituelle du Mexique*, Paris, 1933.
- (5) Rafael Garcia Granadas, *Capillas de indios en Nueva España (1530-1605)*, Archivo Español de Arte y Arqueología, Madrid, No. 31, 1935.
- (6) Antonio de Remesal, *Historia general de las Indias Occidentales y particular de la Gobernación de Chiapa y Guatemala*, Guatemala, 1932. 2 vols. 246.
- (7) G. Kubler, *Mexican Architecture of the Sixteenth Century*, 1948 p. 327.
- (8) R. G. Granadas, *Capillas Abiertas*, Colección Anahuac de Arte Mexicano, vol. 21, México, 1948, 1-16.
- (9) John McAndrew, *The Open-Air Churches of Sixteenth-Century Mexico*, Cambridge, 1965.
- (10) Robert J. Mullen, *Dominican Architecture in Sixteenth-Century Oaxaca*, Arizona, 1975. p. p. 95 ~ 124.
- (11) G. F. Margadant, *Derecho indiano y urbanización*, México, 1980, シンポジウム “La Ciudad, Concepto y Obra” のための未出版報告書。
- (12) 都市の格子プランは西欧はもち論、アメリカ古代でも中国でも見ることが出来る。従って単純に16世紀メキシコ都市計画とルネサンス文化の関係を結びつけることに現実性はない。それよりも設計の容易さ、衛生管理の簡便さ、通行の便利さ、といった事から世界各地で自然に到達したと考える方が良いでしょう。詳細な議論は、G. Kubler, *M. A., I.* p. p. 90-94. ルネサンスの思想との関連を強調しているのは M. Toussaint, *A. C. M.*, 1948
- (13) 西欧との関連についての考察は、Erwin Walter Palm, *Las capillas abiertas americanas y sus antecedentes en el occidente cristiano*, 1953 が詳しい。差異について強調し、西欧とは直接関係ないとする立場は J. McAndrew で綿密な比較を行っている。(J. McAndrew, op. cit., p. p. 231-234.) スペインのイスラム建築との比較は Francisco de la Maza の Torres Balbás, *Musallá y šaria* へのコメントで分析されている。(Anales del I. I. E., XVII, 1949. 88-89) 古代土着世界との関連の強さについては Gloria

- Grajales Ramos, *Influencia indígena en las artes plásticas del Mexico colonial*, 1953. p. 81. Kubler も土着文化との関連の深さを見ている。Kubler, M. A., II, p. 325.
- (14) Toribio Motolinia, *Memoriales*, Lib. I, cap. 34.
- (15) Pablo C. de Gante, *La arquitectura de Mexico en el siglo XVI*, México, 1954, p. 145-146. メキシコでの屋外教会建設活動は16世紀中期に集中し, 17世紀以後の建築例はあまりない(Tzintzuntzan や Zacualpan de Amilpas が例外).
- (16) スペインに於いて, 建築家という職業概念が使われ始めたのは1516年以降のことであった。Vicente Lampérez y Romea, *Historia de la arquitectura cristiana española de la edad media según el estudio de los elementos y los monumentos*, Madrid, 1930, 3 vols 2nd ed., I, p. 32. 膨大な数になる修道院とその付属教会堂の数に対し宗教建築を担当した修道会所属建築家の個人名は資料にほとんど表われない。16世紀中期までプロの建築士はいなかったと見るのが妥当であろう。16世紀後半からは建築に関する出版物が聖職者の手を通じてかなり輸入されている。Fernandes del Castillo 編, *Libros y libreros en el siglo XVI, México*, 1914, José M. Gallegos Rocafull, *El pensamiento mexicano en los siglos XVI y XVII*, México. 1974. 従って建築理論や様式, 技術などは文献を通して学ばれたと考えられるがそれ以前ではこういったマニュアルめいたものもなかったわけだから, 修道士達は西欧での祖传的記憶を元にして職人達を指導していったに違いない。
- (17) R. G. Granados, *Capillas Abiertas*, 1948, p. 8.
- (18) R. G. Granados, *ibid.*, p. 8.
R. F. Guerrero, *Las capillas posas de Mexico*, 1951, p. 15. 古代のピラミッドや神殿は修道院建築の場所にもってこいで, 古代の切石などはそのまま土台に使われた。Epazoyucan, Mixquic, Acolman, Tlatelolco などはその例である。土着宗教信仰の礼拝地と教会の位置関係については R. Ricard, *op. cit.*, pp. 196-198 の記述参照。タイラパンの場合はモンテ・アルバン の石が持ってこられたらしい。
- (19) The Catholic Encyclopedia, *op. cit.*, 1909. "Mass." の項。
- (20) The Catholic Encyclopedia, *ibid.*, G. Kubler, "Colonial Extinction of the Motifs of Pre-Colombian Art" in *Essays in Pre-Colombian Art and Archaeology*, Cambridge, 1961, p. 21.
- (21) 初期にはほとんどが木造であったと言われるが, 現存しているものはめったにない(メキシコ市博物館に一例)。恒久性に問題があったためである。十字架にはまず邪宗の悪魔払いの意味があった。Toribio Motolinia, *Memoriales*, 1903, p. p. 85, 188. Pablo de la Purisima Concepción Beaumont, *Crónica de la……*, México, 2 vols., 1932
- (22) 樹木の代りにアトリオの外壁より低い土手(30 cm ~ 60 cm 位)で歩行用通路を区切っている例も多い(例: Atlatláuhcan, Tepoztlán 等)
- (23) Mixquic の場合などはアトリオはほとんど墓地として使われている。しかしこれが16世紀からの伝統かどうかは疑わしい。

- (24) 西欧伝統の ciborium や umbralacrum との関連性と相違点の分析については J. McAndrew, op. cit., p. p. 297-302 参照.
- (25) François Chevalier, *La Formation des grandes domaines au Mexique. Terre et société aux XVI^e-XVII^e siècles*, Paris, 1952, tr. by Alvin Eustis, *Land and Society in Colonial Mexico*, Berkeley, 1970, p. p. 17, 191.
- (26) Juan de Grijalva, *Crónica de la Orden de NPS Agustín en las provincias de la Nueva España (1623)*, México, 1924, p. 141.
- (27) J. McAndrew, op. cit., p. 343.
- (28) この先・屋外教会の建設は1530年代頃までの布教初期に起こる。それは藁葺き屋根に木の支柱程度のものであった。McAndrewはこの先・屋外教会タイプとして Xacal の例をあげているが筆者はまだ見ていない。(McAndrew. op. cit., p. 341) 1530年代に建てられた恒久的な屋外教会の例は Tlaxcala, そして記録上にしか残っていない San Jose de los Naturales の2つだけである。トラスカラの屋外教会の様式は建築的には孤立しており、後世の様式的規範とはなりえなかった。
- (29) ポーサはプロセッションの小休止と説教, 問答のために機能し, ミサは原則として行われぬ。ポーサと屋外教会の機能はほぼ同じだとする説は Luis McGregor, *Estudios sobre arte colonial mexicano*, México, 1946, p. 80.
- (30) 石造の屋外教会の建造例は1540年代から急激に増える。ここで述べた建設順列はあくまで必要度という現実の要請を分析した概念的なものであり、実際の基本設計の段階ではアトリオ敷地が確保された段階から全体プランが決まっていたし、実際の作業は全体的に平行して進められた。屋外教会よりも天井構造に技術的な難しさを持っていた教会堂の完成は後から手をつけられた屋外教会の完成よりもずっと後のことになるのが通例であった。より複雑な装飾表面を持つファチャダの完成などはさらに後のことになる。従って完成年度から建築様式の変遷を眺めると時間的に様々な様式的矛盾にぶつかり混乱するのだ。屋外教会建築活動のピークは1570年代位で終るが修道院教会建設は1590年代まで続く(典型的一身廊式修道院教会の場合)。
- (31) capilla de indios の呼称は従って単に屋外教会だけを指すのではなく、インディオ信者を対象として建てられた教会, 礼拝堂一般を指すものと解釈される。Visita(s)と呼ばれる小村落の巡回地にはアトリオと屋外教会しかない状態が長く続いた。こういったインディオ小部落にスペイン人がいることはまずなかったし、食事や宿泊のための施設もいらなかったし、事務仕事が多かったからそれ程必要性がなかった。
- (32) Agustín de Vetancurt, *Teatro mexicano, descripción breve de los sucesos exemplares, históricos, políticos, militares, y religiosos del nuevo mundo occidental de las indias*, Madrid, 1960, De los sucesos religiosos の部, 第2章, p. 61. しかし大勢として屋外教会の使用は16世紀末期にはすたれてゆく。原因は数回の流行病の発生によるインディオの人口減少である(1531年, 1545年, 1564年, 1576~77年, 1588年, この中でも1576~77年が最もひどい)。その他に長期的には出生率の低下ということも

挙げられる。(この分析については G. Kubler, *Population Movements in Mexico, 1520-1600*, *Hispanic American Historical Review*, 1942, XXII, pp. 606-643 が詳しい)いずれにせよ、1 回のミサに万単位の間人が集まることはなくなり、屋内スペースでも十分収容しきれるようになった。

- (33) 山の斜面や川、湖、地下水源がある所では当然、配置に特別な考慮が払われるのはもち論だが、平坦地でも古代土着都市の設計秩序を利用するために規範からはずれる例もある(例: Cd. Hidalgo, Tepetitlán)。山の斜面と川にはさまれた例としては Huejutla, Metztlán 等。Tzintzuntzan は湖と古代都市の間にはさまれている例。その他適当な理由が現在では見られない例外的配置をとったものに Cuernavaca 等がある。
- (34) 北門はフランシスコ会にとってはアッシジの聖フランシスコの故事にちなんで極めて重要な意味を持つ。 *Vocabulario arquitectónico ilustrado*, “Porciúncula” の項。北門はドミニコ会やアウグスティヌス会でも使われたがその象徴的意味については不明。おそらく旧約聖書の記述と関連したのだろう。
- (35) Ricard, Toussaint, Granados, Gante, Kubler, McAndrew, J. Fernandez などの分類があるがどれも一長一短である。屋外教会の建設活動期は比較的短かったが、その数の多さと様式の多様さは 16 世紀宗教建築物の中でも群を抜いている。
- (36) この分類法では歴史的時代的変遷の経緯は全く無視している。重複する事は大だが一応歴史的な発生順を辿ってみると D→E→A→B→C となるが、順次発展してきたというわけではなく、DやEのグループとA、そしてB、Cのグループの間に様式的な関連性は見られない。BとCの間には発想の類似性が考えられる。
- (37) 1. Patzcuaro のついに未完成に終わった星形に身廊部を開いた五身廊大聖堂。
2. Cholula の Capilla Real。
3. Metztitlan。現在(1982年1月)は3分の1程度が廃墟のように残っていただけである。
- (38) Agustin de Salazar, *Relación de Cuilapan*, tr. & ed. by Douglas Butterworth, “Dos relaciones antiguas del pueblo de Cuilapa, Estado de Oaxaca”, in *Tlalocan*. vol II., No. 1, México, 1948. この資料は R. H. Barlow. の翻訳でタイトルは “Relaciones of Oaxaca of the 16th and 18 th Century” in *Boletin de studios oaxaqueños*, México, No. 23, 1962. p. 35.
- (39) Ronald Spores, *The Mixtec Kings and Their People*, Norman, 1967, p. 22
- (40) Agustin de Salazar, *ibid.*, p. 39. 1534年7月24日法王、国王、ドミニコ会総会でのメキシコ布教活動許可が正式に伝えられた。
- (41) Francisco de Burgoa. *Geografica descripción de la parte septentrional del polo ártico de la américa, y nueva iglesia de las Indias occidentales y sitio astronómico de esta provincia de predicadores de anteguera, valle de Oaxaca*, 2 vols. México, 1934. vol. 1. p. 396 では人口1万4千人。これは17世紀の記述である。1571年には約3万人いたとするものもある(J. McAndrew, *op. cit.*, p. 598, 出典不明)。Francisco del Paso y Troncoso ed., *Epistolario de Nueva España*, México, 16 vols, 1939-42, vol. XIII では1597年

3001人(女,子供含まず)となっている。(G. Kubler, op. cit., p. 25 Table A 参照). 1550年代のクイラパン人口総数としては本稿の推計が妥当だろう。Mullenの表(op. cit., Appendix, Table IV. p. 242)とも対応している。

- (42) McAndrew はポーサの跡らしきものがあつたと記述している。J. McAndrew, op. cit., p. 611(調査年不明)。筆者も礎石部分と思われるものの残存物を確認している(1981年)。
- (43) このミステカ文字の解読に関する John Paddock や Alfonso Caso の議論の紹介は Mullen, *Dominican Architecture in Sixteenth-Century Oaxaca*, p. p. 104, 122, 124 に詳しい。なおアラビア数字で1555の数字も併記されている。
- (44) Benedict Henderson, O. F. M. 神父(1965年からメキシコ滞在。1970年死亡)の分析。引用は Mullen, op. cit., p. 111。
noviciado とは修練生・新改宗者の寝泊りする寄宿舎のようなもの。
- (45) Francisco de Burgoa, op. cit., vol. I, p. 402
- (46) 第1次資料としては *Libro de actas de los capitulos provinciales de la provincia de Santiago de México, orden de predicadores, siglo XVI. (1559-1587)*, のうち Tomo 11 の一部が I. N. A. H. の Archivo Historico の Colección de D. Federico Gómez de Orozco の中に収められているが未出版古文記録。 *Actas provinciales de la provincia de Santiago de México del orden de predicadores, 1540-1589*, Univ. California, Bancroft Library, California. カリフォルニア版には1559年, 1561年…という風に断続的に10年分程粉失している。出版物では Agustín Dávila Padilla, *Historia de la fundación y discurso de la provincia de Santiago de México de la orden de predicadores*, México, 1955
Wigberto Jiménez Moreno の Torres de Mendoza 編 *Colección de Documentos*, 1866, vol. 5 からの抜粋再編集出版, *Relación de la fundación, capitulos y elecciones, que se han tenido en esta Provincia de Santiago de esta Nueva España, de la orden de predicadores de Santo Domingo, México*, 1944
Hernando de Ojea, *Libro tercero de la historia religiosa de la provincia de México de la orden de Santo Domingo*, México, 1897
Alonso Franco y Ortega, *Segunda parte de la historia de la provincia de Santiago de México*, México. 1900.
- (47) Mullen, op. cit., p. 102, その他 McAndrew (p. 599) Kubler (p. 296) 等。Burgoa の記述では1555年になっている。(op. cit., vol. I, p. 399)これは屋外教会完成の時と混同したのではないか。
- (48) Mullen, op. cit., p. 234. Appendix. Table II 参照。
- (49) Mariano Cuevas, *Historia de la iglesia en México*, 1942, 5 vols. vol. I. p. 341.
- (50) Mullen, op. cit., p. 111
- (51) J. McAndrew. はクイラパンの屋外教会を全てこの名称で書いている。op. cit., p. 601 に理由説明。

- M. Toussaint, "Tecali, Zacatlán, and the Renacimiento Purista in Mexico", *The Art Bulletin*, XXIV. No. 4, 1942. p. 318.
- G. Kubler, *M. A. op. cit.*, p. p. 232-233.
- Encyclopedia of World Art*, Lodon. 1965, "Church" の項, "basilica" の項. *Vocabulario arquitectónico ilustrado*, 1975, México, "basilica" の項.
- Bernard Bevan, *History of Spanish Architecture*, N. Y., 1939 等参照.
- (52) Tehuantepec の近くの Tequisistlán と Nejapa(n). 現在どちらも塗り込められている。
- (53) G. Kubler, *M. A. op. cit.*, p. 304. 壁の厚さから見て屋根は最低でも 12 m の高さが可能である。設計された形跡がないのは技術的に解決できなかったと考えるよりも単に最初からその意図がなかったと考える方が自然だ。
- (54) McAndrew, *op. cit.*, p. p. 605, 618.
- (55) Burgoa, *op. cit.*, p. 402. 1578 年以降の話になる。
- (56) Aznar, "La intervención de Rodrigo Gil de Hontañón en el manuscrito de Simon García", *Archivo español de arte*, No. 45, 1941. メキシコ建築との対比での分析は Kubler, *M. A. op. cit.*, p. 242.
- (57) M. Toussaint, *Tecali, Zacatlán.....*, 1942, *op. cit.*, p. 318.
- J. McAndrew, *op. cit.*, p. p. 599, 600.
- (58) Mullen は McAndrew の屋外教会としては意図されなかった (*op. cit.*, p. p. 615-617) という結論に達する議論はアカデミック過ぎると批判しているが (Mullen, *op. cit.*, p. p. 120-122 postscript), 筆者も同感である。

文献目録

- Actas provinciales de la provincia de santiago de méxico del orden de predicadores*, 1540-1589, Univ. California, Bancroft Library, Berkeley, California. 未出版記録.
- Aznar, J. Camón. "La intervención de Rodrigo Gil de Hontañón en el manuscrito de Simon García." *Archivo español de arte y arqueología*, No. 45, 1941. Madrid,
- Beaumont, Pablo de la Purísima Concepción. *Crónica de la provincia de los santos apóstoles San Pedro y San Pablo de Michoacán*, Archivo General de la Nación, 1932, 2 vols. México.
- Bevan, Bernard, *History of Spanish Architecture*, Scribner, 1939, New York/London.
- Burgoa, Francisco de. *Geográfica descripción de la parte septentrional del polo ártico de la América, y nueva iglesia de las indias occidentales y sitio astronómico de esta provincia de predicadores de Anteguera, valle de Oaxaca.....*, 2 vols., Archivo General de la Nación, 1934. México.
- (The) *Catholic Encyclopedia*. 1909. New York.
- Chevalier, François, *La formation des grandes domaines au Mexique. Terre et société aux*

- XVI°-XVII° siècles, Paris, 1952. tr. by Eustis, Alvin, *Land and Society in Colonial Mexico*, 序文 Simpson, Lesley Byrd., 1970, Berkeley.
- Cuevas Mariano, *Historia de la iglesia en México*, México, 1942. 5vols.
- Dávila Padilla, Agustín. *Historia de la fundación y discurso de la provincia de Santiago de México, de la orden de predicadores, por las vidas de sus varones insignes, y casos notables de Nueva Españã*, México. ed. 1955. 初版は 1596
- Encyclopedia of World Art*, Mc-Grow Hill, England, 1965.
- Fernandez, Justino. *Arte mexicano de sus origenes a nuestro dias*, 1980, 初版 1958 年, México.
- Fernandez del Castillo, Francisco, *Libros y libreros en el siglo XVI*, Boletín de la Biblioteca Nacional, vol. 6, 1914, México.
- Flores Guerrero, Raúl, *Las capillas posas de Mexico*, Enciclopedia mexicana de arte, 1951, México.
- Franco y Ortega, Alonso, *Segunda parte de la historia de la provincia de Santiago de México orden de predicadores en la nueva España*. ed. Secundino Martínez, 1900, México.
- Gallegos Rocafull, Jose M., *El pensamiento mexicano en los siglos XVI y XVII*, 1974, México.
- Gante, Pablo C. de. *La arquitectura de Mexico en el siglo XVI*, México, 1954.
- García Granados, Rafael, "Capillas de indias en nueva España", *Archivo español de arte y arqueología*, No. II. 1935, Madrid.
- 同上, *Capillas abiertas*, colección anahuac de arte mexicano, vol. 21, 1948, México.
- García, Simon → Aznar 参照.
- Grajales Ramos, Gloria, "Influencia indígena en las artes plásticas del México colonial", *Anales del Instituto de Arte Americano e Investigaciones Estéticas*, No.6. 1953, Argentina.
- Grijalva, Juan de. *Crónica de la orden de NPS Augustin en las provincias de la nueva España*, 1924, México.
- Kubler, George. "On the Colonial Extinction of the Motifs of Pre-Columbian Art", *Essays in Pre-Colombian Art and Archaeology*, 1961, Cambridge.
- 同上. *Mexican Architecture of the Sixteenth Century*, New Haven, 1948, 2 vols.
- 同上, "Population Movements in Mexico, 1520-1600", *Hispanic American Review*, XXII. 1942.
- Lampérez y Romea, Vicente, *Historia de la arquitectura cristiana española de la edad media según el estudio de los elementos y los monumentos*, 1930, 3 vols. Madrid.
- Libro de actas de los capítulos provinciales de la provincia de Santiago de México, orden de predicadores, siglo XVI(1559-1587)*, vol. 11, Archivo histórico, I. N. A. H. Colección de D. Federico Gómez de Orozco, México. 未出版記録.
- Margadant, G. F., *Derecho indiano y urbanización*, México, 1980, シンポジウム "La Ci-

udad, Concept y Obra” への報告のための資料。

Maza, Francisco de la, “Musallá y šarīa”, Review of Torres Balbás, *Anales del Instituto de Investigaciones Estéticas*, XVII, 1949, México.

McAndrew, John. *The Open-Air Churches of Sixteenth Century Mexico*, 1965. Cambridge.

McGregor, Luis. *Estudios sobre arte colonial mexicano*, 1946, México.

Motolinía, Toribio (de Benavente). *Memoriales*, ed., Luis García Pimentel, *Documentos Históricos de Mexico*, I, México/Paris/Madrid, 1903. 1971年のメキシコ再版は *Memoriales o libro de las cosas de la nueva españa y de los naturales de ella*, UNAM, México.

Mullen, Robert J., *Dominican Architecture in Sixteenth-Century Oaxaca*, 1975, Arizona.

Ojea, Hernando de, *Libro tercero de la historia religiosa de la provincia de méxico de la orden de Santo Domingo*, Ed., Agreda y Sánchez, 1897. México.

Paso y Troncoso, Francisco del. ed., *Epistolario de Nueva Españā, 1505-1818*, 16 vols. 1939-1942. Méxco.

Relación de la fundación, capítulo y elecciones, que se han tenido en esta provincia de Santiago de esta Nueva Españā de la orden de predicadores de Santo Domingo, 1569, ed. Torres de Mendoza, Colección de Documentos, 1866, vol. 5 に収録。1944年 Wigberto Jiménez Moreno の序文付で再編集出版, Mexico.

Remesal, Antonio de. *Historia general de las indias occidentales y particular de la gobernación de Chiapa y Guatemala*, Sociedad de Geografía e Historia, 1932, Guatemala. 2 vols. 初版は Madrid, 1620.

Ricard, Robert. *Conquête Spirituelle du Mexique*, Paris, 1933. Tr. Lesley Byrd Simpson, *The Spiritual Conquest of Mexico*, 1966, London. スペイン語版は 1947 年.

Salazar, Agustin de. *Relaciones de Cuilapan*, スペイン語 ed. Robert H. Barlow. “Dos relaciones antiguas del pueblo de Cuilapa, Estado de Oaxaca”, として *Tlalocan*, vol. II, No 1. 1948. に収録。後に Douglas Butterworth によって英語に編集翻訳 “Relaciones of Oaxaca of the 16th and 18th Century” in *Boletín de Estudios Oaxaqueños*, No. 23, 1962, Mexico, に転載.

Spores, Ronald, *The Mixtec Kings and Their People*, University of Oklahoma Press, 1967, Norman.

Toussaint, Manuel. *Arte Colonial en Mexico*, México 1948 年初版. tr. Elizabeth Wilder Weismann, *Colonial Art in Mexico*, 1967, Austin.

同上. *Iglesias de Mexico*, 6 vols., 1927, México,

同上. “Tecali, Zacatlán, and the Renacimiento Purista in Mexico”. *The Art Bulletin*, vol. XXIV. No. 4. December, 1942. J. McAndrew との共作.

Vetancurt, Agustín de. *Teatro mexicano, descripción breve de los sucesos exemplares*,

históricos, políticos, militares, y religiosos del Nuevo Mundo occidental de las Indias; Menologio franciscano de los varones más señalados; Tratado de la Ciudad de México; Tratado de la Ciudad de Puebla. México, 初版 1698, 第2版 4 vols. 1870/71, 最近ではMadrid, 1960/62等。

Vocabulario arquitectónico ilustrado, 1975, México.

Palm, Erwin Walter, "Las capillas abiertas americanas y sus antecedentes en el occidente cristiano", *Anales del Instituto de Arte Americano y Investigaciones Estéticas*, 1953, No. 6, Argentina.

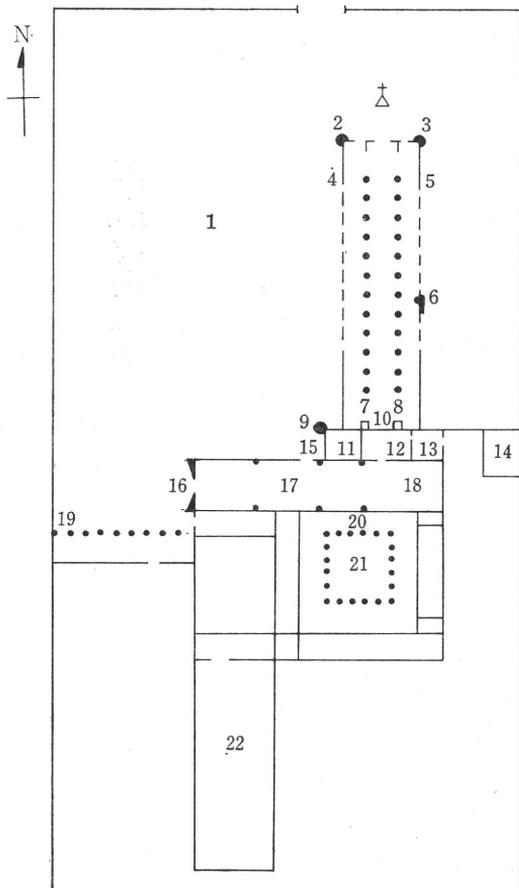
クイラパン見取図(1部省略)

縮尺 1/2000

(但し壁の厚さ無視)

1981年5月

1. アトリオ
2. } 塔
3. }
4. 三身廊式屋外教会西外壁
5. " 東外壁
6. 説教台
7. } 中央身廊アーケード
8. } (7の列は痕跡のみ)
9. 塔(基礎部のみ)
10. 聖所開口部
11. 封鎖された部屋
12. 聖所
13. 聖器安置室
14. 鐘楼
15. 教会堂北門ファチャダ
16. 教会堂西ファチャダ
17. " 身廊部
18. " 内陣
19. ポルテリアーア・アーケード
20. 修道院廻廊部
21. 修道院中庭
22. ノビシアード



写 真 リ ス ト



写真1：クイラバン、三身廊ホール型屋外教会北正面ファチャダの全景、アトリオ北西より撮影。

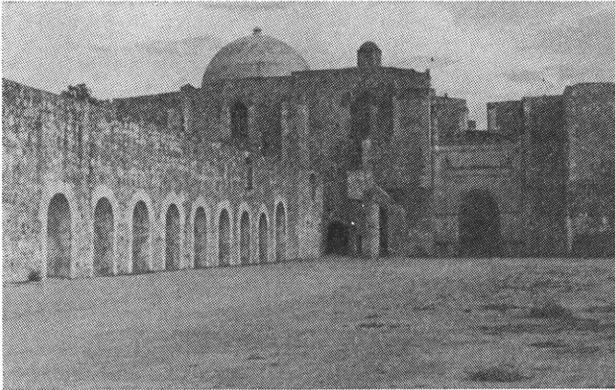


写真2：クイラバン、三身廊ホール型屋外教会西側身廊壁の開口部アーチと後ろに教会堂。

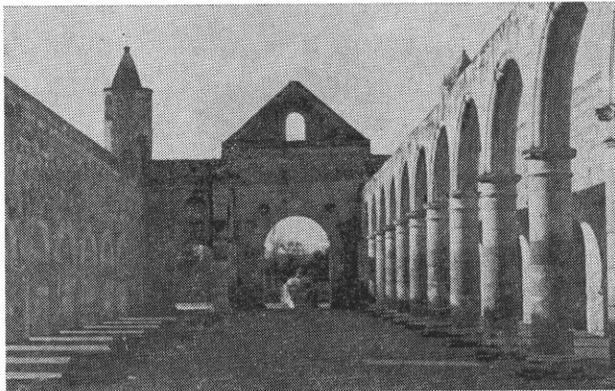


写真3：クイラバン三身廊ホール型屋外教会身廊部。南側聖所よりファチャダ内側を望む。右側に擬似トスカナ円柱で支えられたアーケード。

(すべて 1981年 5月筆者撮影)